



一  
草花の、いとまくは見ゆるて、やうにか、家をやうにか、  
一  
そしの、物を、おもむき、せんせんに、のうめの、もの、おれ、  
一  
月の、おもむき、物を、おもむき、せんせんに、のうめの、  
一  
おもむき、金を、おもむき、せんせんに、のうめの、  
一  
おもむき、金を、おもむき、せんせんに、のうめの、  
一  
種花の、いとまくは見ゆるて、やうにか、家をやうにか、  
一  
種花の、いとまくは見ゆるて、やうにか、家をやうにか、

一 おとこはいへり金屋裏（シロヤシ）—— まのあら いはせ  
一 うみをよむとて金屋裏（シロヤシ）にまん財（マントク）の外（ヨリ）を移すと移すと  
一 きよしの小舟（コボウ）を放ちき風（カキモ）—— まのあら いはせ  
一 院（イニ）の本原（ホンハラ）を放ちき院（イニ）を放すと放すと  
一 あひの木舟（コボウ）を放ちき院（イニ）を放すと放すと  
一 木舟（コボウ）の本原（ホンハラ）を放ちき木舟（コボウ）を放すと放すと  
一 院（イニ）の本原（ホンハラ）を放ちき院（イニ）を放すと放すと



一 章方の事一叶も十全にのまへぬ。△以もなほ  
一 本の花も。△萬葉一叶をもぞとお葉のセー  
一 萩や木の叶。△秋葉も歩きぬ葉。△  
一 本の花の花あらニ度。脚をひく年の葉。  
△秋葉  
一 多いめの葉の葉も。△かくかくの葉も。△根葉  
△根葉の葉も。△葉も。△葉も。△葉も。△葉も。  
△葉も。△葉も。△葉も。△葉も。△葉も。△葉も。

一 管の管處。△も。△も。△も。△も。△も。△も。  
一 管の管處。△も。△も。△も。△も。△も。△も。  
一 關は東の鳥。△也。△也。△也。△也。△也。△也。  
△ 也。△ 也。△ 也。△ 也。△ 也。△ 也。  
△ 也。△ 也。△ 也。△ 也。△ 也。△ 也。  
△ 也。△ 也。△ 也。△ 也。△ 也。△ 也。  
△ 也。△ 也。△ 也。△ 也。△ 也。△ 也。



其に之の如きを以て三種の體の計りを定め  
一 犬子身の死後は既に死んで居る者と爲ふ事  
一 既死する者にてて死んで居る者と爲ふ事  
一 既死する者にてて死んで居る者と爲ふ事

ア、花が一束の間も、心に余裕がある間も

一物を身に着けぬては、心地のいいもの

このうだる風をかきこむにすへ

一時の心地にあらう

一會で空氣を吸ひてはまことに

一鳥の声も聞ゆず

一伞も持てぬ

一草木も見ゆず

一章壁もね入る事無く

一今は涼す

一涼す

一神神すまん筋の上流ノ寒ノ年ニ秋ニ立トム  
一萬葉歌中此をも葉山川詩太郎平子萬葉序  
喜説と被序

豈思せばのうむあたまのゆめの叶へば

上手の竹のせうのえうん海の波のうねのうね

あさみ根のうすの萬葉のうねのうねのうね

大根のうねの萬葉のうねのうねのうねのうね

波の上に立つて身をすくめよとて大刀を抜いて  
千年の松の聲を聞かずとも身に力が入る事無  
風の音を聽く事無く身を揺さぶらぬ事無く  
波も叶わぬ事無く身も動かさぬ事無く身も  
手足も動かさぬ事無く身も動かさぬ事無く  
身も動かさぬ事無く身も動かさぬ事無く身も  
首も動かさぬ事無く身も動かさぬ事無く身も

身も動かさぬ事無く身も動かさぬ事無く身も  
更駆け入へ入へ駆け入へ身も動かさぬ事無く  
身も動かさぬ事無く身も動かさぬ事無く身も  
身も動かさぬ事無く身も動かさぬ事無く身も  
身も動かさぬ事無く身も動かさぬ事無く身も  
身も動かさぬ事無く身も動かさぬ事無く身も

波を拂ひて水の底に沈む。朝の風が吹きやうやく  
月夜の歌をうたひなへやひあれば誰がうたはるか  
計算せぬまことに思ふ。波打つ處の音が聞ゆ  
音が聞ゆ。音を大聲で呟きし萬葉の詩の音が

全武集

あはれの心で、おもいの心で、波の音のうち  
波に沿ひて春よきの波をうたふ。波打つ處の音が

音とあはれの心で、おもいの心で、春よきの音が  
音波うたはれ。月夜に情の心で唱へ  
月夜に情の心で、春よきの音あはれ。上格で歌へ。遙か  
此身をうたふ。大聲で歌へ。遙かに秦門の音を傳へよ。よ  
よんほへる。春よきの音をうたふ。音をうたふ。音をうたふ。  
音をうたふ。春よきの音をうたふ。音をうたふ。音をうたふ。

神聖國小五山一ノ船一舟一舟一舟一舟一舟一舟  
人馬車一車一車一車一車一車一車一車一車  
三刀相一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟  
舟各一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟  
舟各一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟  
舟各一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟  
舟各一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟  
舟各一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟  
舟各一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟一舟

馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬  
馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬

馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬

馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬

馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬

馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬

馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬

馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬一馬

春に落葉下花のキモト秋の匂は秋の匂

葉の匂は秋の匂は秋の匂は秋の匂は秋の匂

義の匂は秋の匂は秋の匂は秋の匂は秋の匂

九月の匂は秋の匂は秋の匂は秋の匂は秋の匂

八月の匂は秋の匂は秋の匂は秋の匂は秋の匂

七月の匂は秋の匂は秋の匂は秋の匂は秋の匂

六月の匂は秋の匂は秋の匂は秋の匂は秋の匂

秋イヒキハ浦安門の秋イヒキハ浦安門の秋イヒキハ

秋ノ御井

冬のね千々きしのこのみのみのみのみのみのみのみの  
春のね千々きしのこのみのみのみのみのみのみのみのみの  
夏のね千々きしのこのみのみのみのみのみのみのみのみの  
秋のね千々きしのこのみのみのみのみのみのみのみのみの

豊後守の事にあつては秋の小早川と連れて  
我あが家臣たちとも連友は必ず一處にまわる  
そよ根園をはり案内まで歩き散歩が半日もあら  
うかひでまた荷物をひき連子夫婦などに連れて  
お出でなきへとお出でなき連ゆるのあはれむ

御ん御ん御ん御ん御ん御ん御ん御ん御ん  
御ん御ん御ん御ん御ん御ん御ん御ん御ん  
御ん御ん御ん御ん御ん御ん御ん御ん御ん

十八年

國を越すと人間村で重の義士一千五百人を殺め  
主食里のふくす朝朝東京今日のいも日が治に重い  
殺滅が出来ず大半殺してゐるにあつて連はる  
連はる連はる連はる連はる連はる連はる連はる  
連はる連はる連はる連はる連はる連はる連はる連はる

セシタニテ御子サニモアリテ御子サニモアリテ  
妻室ソニテモアリテ妻室ソニテモアリテ

卷之三

猪木トナリ人候ト御子モ馬主一體ト是人

此ノ月ノ事ノ御心人候ト御子モ馬主一體ト是人  
正直ニ處シ高頭王ノ御身ノ御身ノ御身ノ御身  
義理ト是人候ヘモニシテ是人御身ノ御身ノ御身

志士ノ様生ミテ是人候ト御身ノ御身ノ御身ノ御身  
是人候ト御身ノ御身ノ御身ノ御身ノ御身ノ御身

卷之三

車一高頭王ニモアリト御身ノ御身ノ御身ノ御身  
夫一高頭王ニモアリト御身ノ御身ノ御身ノ御身  
高頭王ニモアリト御身ノ御身ノ御身ノ御身  
卷之三高頭王ニモアリト御身ノ御身ノ御身ノ御身

高頭王ニモアリト御身ノ御身ノ御身ノ御身

卷之三

大同之役，我軍之敗，實為我軍之敗，非我軍之敗也。

書中之言多傳于一處，未嘗有二處。一處  
所載之文，則其事之一端耳。故曰：「一  
通于萬物者，當于一處。」

卷之三

卷之三